



農学部の誕生と安城キャンパス

— 学部の誕生と草創期① —

堀田慎一郎

農学部誕生と安城キャンパス

— 学部の誕生と草創期① —

堀田 慎一郎

目次

はじめに	2
一、戦前期の農学部創設運動	3
二、農学部誕生への道	13
三、草創期の農学部と安城キャンパス	25
四、安城キャンパスの学園生活	33
五、東山キャンパスへ	44
おわりに	53

はじめに

名古屋大学農学部管理棟の西側に、六階建ての研究棟に達するほどの高さを持つ、三本の大樹がそびえ立っています。いずれも樹齢五〇年をこえるメタセコイアです。

これらは、現在では農学部のランドマーク的な存在ですが、最初に植樹されたのが東山キャンパスでもなければ名古屋市ですらなく、安城市であったことを知る人は意外に少ないのではないのでしょうか。

名古屋大学農学部は、一九五一（昭和二六）年、新制名古屋大学第八番目の学部として創設されました。一九九三（平成五）年に教養部を改組した情報文化学部はあるものの、名大では実質的に最も新しい学部です。なぜ最後に設置されることになったのでしょうか。

また、歴史の古さでは一步をゆずる農学部ですが、創設までの紆余曲折うよまげつせつや、草創期を安城市ですごしたことなど、他の学部にはない歴史を持っています。本書は、この農学部の誕生に至る道のりと、安城キャンパスでの一五年間をへて、現在の東山キャンパスに移転するまでの歴史を、愛知県や安城市など地元の動きを視野に入れながら、分かりやすくまとめたものです。

一、戦前期の農学部創設運動

◆農業県愛知

愛知県の産業といえば、中京工業地帯やトヨタ自動車などを中心とする工業であり、「農業県」というイメージはわきにくいかも知れません。しかし、三河地方を中心に、花き（観賞用植物）生産では全都道府県のトップにあるなど、全国で五番目から六番目の農業生産額をほこっています。

戦前期においても、愛知は日本有数の農業県でした。江戸時代以来の棉作や藍作は、開国によつて衰退しましたが、明治後期から大正期にかけて養蚕が急速に発展し、一九一九（大正八）年には繭^{まゆ}生産額で全国第二位となりました。その後、大都市名古屋の発展を背景に野菜や果樹の生産も伸び、一九二九（昭和四）年の農業生産額は全国第一位でした。

しかし、これは日本全体の状況でもありませんが、生産額の絶対量で見れば、工業の飛躍的な発展の前に農業は取り残され、農村の沈滞が大きな問題となったのも、大正から昭和初期にかけての時代です。農村部の多い三河地方を中心に、農業振興の基盤としての高等農業教育機

関を求める声が高まっていきました。

◆日本デンマーク安城

戦前期における愛知県の農業で異彩を放っていたのが、西三河の碧海郡へきかいです。この地域は、一八八〇（明治一三）年に明治用水が完成してから耕地開発が急速に進み、めざましい農業の発展が見られました。特に安城あんじょう町は、碧海郡の中心地、ひいては県農業の中心地として、農業その他の施設が集まり、「農都」とも呼ばれるようになりました。

碧海郡の農業は、過度に米作に依存する経営から脱却するため、養蚕や養鶏、野菜や果樹生産などを積極的に導入して、経営リスクの分散化や労働力と資本の効率的な運用をはかった点に特徴がありました。これを多角形農業といい、敗戦のどん底から復興を果たしたデンマーク農業の先進的な多角経営になぞらえて、「日本デンマーク」と称されたのです。また、産業組合（農協の前身）が農産物をブランド化して大都市へ販売したり、農作業の共同化をはかったりと、農業の組織化を進めたことも特徴の一つです。

やがて日本デンマーク農業は全国的にも有名になり、農村振興の一つのモデルとして注目されるようになりました。



安城農林学校（国書刊行会刊『写真集 明治大正昭和安城』より）

◆安城農林学校

日本デンマークの拠点の一つになっていたのが、愛知県立安城農林学校（現愛知県立安城農林高校）です。同校は一九〇一（明治三四）年、県で初めての甲種農業学校として、碧海郡安城村（現安城市池浦町）に設置されました（当初は愛知県立農林学校）。専門学校などの高等教育機関へ進学することもできる上級の中等教育機関です。

初代校長の山崎延吉のぶきちは、農業を国家・社会の根幹として意義づける農本主義思想の提唱者として、のちに全国的にも有名になった人物です。山崎は、その勤労主義・精神主義を校則四訓に定めるなど、独自の農業教育を展開しました。彼が安城農林を去ったのちも山崎イズムは堅持され、その教え子たちが日本デンマーク農業の中心になっていったのです。

◆高等農業教育機関への期待

やがて、日本屈指の農業学校となった安城農林学校を、高等教育機関に昇格させようとの声が高まります。

一九一七（大正六）年、松井茂県知事は愛知県会において、三河に高等農林学校を設立すべきであると述べ、政府にその設置を要望しました。その翌年には県会から内務大臣に同趣旨の建議書が出されています。そして二〇年と二四年には、県会から知事に対し、安城農林学校の専門学校昇格を要望する意見書が提出されました。しかしいずれもうまくいかず、そうしているうちに、いずれも官立の三重高等農林学校（一九二一年）と岐阜高等農林学校（一九二三年）が近県に設立されてしまいました。

また、すでに愛知県には、県立愛知医科大学（一九二〇年、現名古屋大学医学部）、名古屋高等工業学校（一九〇五年、現名古屋工業大学）、第八高等学校（一九〇八年、名古屋大学旧教養部）、名古屋高等商業学校（一九二〇年、現名古屋大学経済学部）と、四校もの官公立高等教育機関がありました。総合大学の学部としてでもない限り、高等農業教育機関を持つことは難しくなっていたのです。

◆大正・昭和初期の総合大学創設運動

愛知県における本格的な総合大学創設運動は、一九一八年（大正七）年に、県会の意見書が内務大臣に提出されたことを最初とするようです。その文面には農学部の文字を見ることはできませんが、先ほどふれた一九二四年の県会意見書に、「安城農林学校を昇格せしめ、多年本県民の熱望して已まざる総合大学建設に対する基礎を強固ならしむる」とあるのは注目されます。愛知県に創設されるべき総合大学に、農学部を置くことが展望されるようになったのです。

しかし一方で、この時期の総合大学創設運動が、名古屋市を中心とするものであったことは否定できません。すなわち、運動の背景には、全国第三位の人口を持つ大都市に成長していた名古屋市にふさわしい最高学府、すなわち総合大学たる帝国大学を持ちたいという願望がありました。実際、一九二〇年代に展開された総合大学創設運動では、設置場所は愛知ではなく、「名古屋」と表現され、一九二七（昭和二）年に結成された運動団体は、「名古屋総合大学設立期成同盟会」でした。後援者も名古屋市の商工業関係者がほとんどです。この傾向は程度の差はあれ以後もつづき、名古屋大学が「愛知大学」ではない理由の一つともいえます。

ただこの時期の総合大学創設運動は、政府の理解がえられず挫折し、やがて愛知医科大学の官立移管運動が始まりました。そして一九三一年、官立名古屋医科大学が誕生しました。

◆総合大学創設運動の再開と農学部

愛知県が官立大学を持つに至ると、昭和恐慌を乗り切った名古屋の商工業のさらなる成長を背景に、総合（帝国）大学創設運動も新たな展開を見せるようになりました。その先頭に立ったのが、名古屋医科大学の学長になった田村春吉はるきちです。田村は、名医大を母体として名古屋に総合大学を創設することを構想し、持ち前の行動力と政治力で運動を推進しました。口を開けば所かまわず総合大学の必要を説き、友人で当時の衆議院議員加藤鏢五郎は、当時田村のことを「総合大学君」などとあだ名していたと回想しています。

この時期の運動の特徴の一つは、農学部の設置が明確にめざされていたことです。一九三五（昭和一〇）年、愛知県会は文部大臣と愛知県知事に意見書を提出しますが、ここでは「総合大学（理科、工科、商科、農科、医科）を設立し……」と述べられています。これ以後も農学部の設置は、優先順位の差こそあれ、運動を担った行政、政財界、ジャーナリズムなどの共通認識でありつづけました。

一九三八年三月、「名古屋帝国大学設立に関する建議案」が衆議院本会議で可決されましたが、そこでは医学部・工学部・理学部・農学部の設置が求められていました。また、同年五月一七日の『新愛知』（中日新聞の前身）朝刊には、「農学部設置の要望」と題する社説が掲載されています。

◆一五年戦争と田村春吉の農学部構想

この当時、農学部が注目された背景の一つに、一九三一（昭和六）年の満州事変を端緒とするいわゆる一五年戦争があります。日本は、満州（中国東北部）全域を占領し、一九三二年には傀儡国家「満州国」を作り出した後も、中国大陸への勢力拡大を志向しつづけ、ついに一九三七年七月の盧溝橋事件をきっかけに日中全面戦争となりました。日本が支配下に置いた満州をはじめとする広大な中国大陸を開発するための人材が、多く必要とされるようになってきたのです。

田村春吉の農学部構想も、これに対応する側面の強いものでした。当時の県会議員の回想によると、田村は、日中戦争は一時的なものであり、学術関係者は戦争終結後の「平和のために協和と親善に努め、そして産業と交易を計り、特に両国民の民生向上に努力すべき」であり、



田村春吉初代医学部長
(第二代総長)

「大陸へわが名大の農学部を設置して、学生は両国の優秀なるもの半数宛を入学せしめ」という構想を語ったといえます。また当時の愛知県知事の回想によると、軍部を通じて満州に演習林を獲得し、その収入で農学部を経営するという構想も持っていたようです。

◆農学部設置ならず

しかしながら、当時の政府や軍部が重視していたのは、何といっても戦争を遂行するための重化学工業生産力であり、特に工学の技術者の拡充が最優先されました。地元による創設費の負担を提示しての陳情にもかかわらず、当初の大蔵省による創設案は、名古屋医科大学を母体とする医学部と新設工学部の二学部のみという厳しいものでした。これに対し愛知県は、やむなく農学部の設置を取り下げ、医・工・理の三学部の創設案で交渉しますが、これすら完全には成功せず、紆余曲折の末、医学部と理工学部の二学部とするのが精一杯でした。当時の政府は、農学部の新設を認める気は全くなかったようです。

それでも、各方面の農学部設置運動は根強くつづけられました。名古屋帝国大学の創設が決まった一九三九（昭和一四）年の第七四回帝国議会でも、愛知県選出の衆議院議員などから、農学部設置の必要性を政府にうったえる委員会質問がなされています。

また、この当時農学部を置いている総合大学といえば、東京・京都・九州・北海道の四つの帝国大学のみ（台北帝大には理農学部があった）であったことから、名古屋帝国大学に農学部を望む声は、愛知県だけではなく、東海や中部地方を含めた幅広い地域からのものでもありました。先ほどふれた「名古屋帝国大学設立に関する建議案」は、愛知・三重・静岡・岐阜・長野の五県選出の全衆議院議員によるものです。一九三八年の五月には、岐阜市までが農学部創

設運動に乗り出し、同市で開催された中部日本都市農会連合会総会では、農学部設置が決議され愛知県に陳情したとの新聞記事も見られます。

◆名帝大創設後の農学部設置運動

一九三九（昭和一四）年四月一日に名古屋帝国大学（名帝大）が発足すると、もとじ 渋沢元治初代総長の第一の課題は、翌年からの理工学部の新設準備、さらには理学部の独立となりました。しかしその一方で、渋沢総長や田村春吉医学部長の農学部創設への熱意はおとろえず、特に一九四二年に理学部独立が達せられると、太平洋戦争の真つ只中にもかかわらず、農学部の設置が本格的に模索されました。



渋沢元治初代総長

文部省は、農学部の入学志望者数が少ないこと、南方（東南アジア）の開発には高等農業学校の卒業生で十分であること、他の帝国大学（東北大学）からも農学部設置が申請されていること、などを理由に消極的でしたが、渋沢総長はあきらめませんでした。

渋沢総長の日記によれば、渋沢は一九四三年六月一日の名帝大建設委員会において、講堂と図書館の建

設のために集められた寄付金一〇〇万円を使って敷地を拡張し、農学部を設置することが「本学の為永遠の策」であると述べました。さらに東京帝大の教授に委嘱して農学部新設の予算案を作成し、政府予算に組み入れることを文部省に要請しましたが、うまく行きませんでした。敷地の取得も、徳川家の所有地を買収する直前まで行きましたが、これも大蔵省の許可がおりず断念しています。

二、農学部誕生への道

◆戦争の終結と大学復興問題

前章で見てきたように、名古屋帝国大学（一九四七年一〇月一日から名古屋大学（旧制）に改称）に農学部を設置することを阻んでいた大きな要因は戦争でした。しかしその戦争が一九四五（昭和二〇）年八月一五日に終わっても、農学部誕生への道はなお容易なものではありませんでした。

それは、一つには、既存学部の復興が大きな課題としてあったからです。特に医学部や附属病院の鶴舞キャンパスは、空襲によって施設の多くが焼失してしまったため、その復興は難事をきわめました。また、戦時下に建てられた工学部と理学部の施設は、物資欠乏の影響で貧弱なものにならざるをえず、これへの対策も必要でした。さらに、残っていた大学建設資金も、敗戦後のインフレーションによってほとんど価値を失ってしまいました。

渋沢総長は、大学復興のため奔走しているうちに体調をくずし、一九四六年一月に退任しました。これに代わって田村春吉が第二代総長に就任し、農学部を含む新学部の創設による本格

的な総合大学実現の任にあたることになりました。

◆新学部創設構想と農学部

総合大学の実現に情熱を燃やす田村春吉総長は、就任した一九四六（昭和二一）年、早くも翌四七年度政府予算の概算要求に、農学部・文学部・法学部・経済学部の四学部の創設案を提出しました。

しかし、日本中が敗戦からの復興に追われていた当時、四学部もの新設を全て政府の予算でまかなうことは困難でした。とりわけ農学部の設立には、校舎だけではなく、良質で広い農場や演習林などの大規模な付属施設が不可欠であり、他の三学部をはるかに上回る経費が必要です。地元の支援がなければ、とても実現は不可能でした。

そこで田村総長は、須川義弘事務局長の進言をいれ、名古屋財界に後援会の立ち上げをはたらきかけました。そして一九四六年一〇月、桑原幹根くわがらみきね愛知県知事、佐藤正俊名古屋市長、三輪常次郎名古屋商工会議所会頭を発起人として、名古屋帝国大学復興後援会が結成されました。さらにその翌月には、臨時愛知県会において、総理大臣・文部大臣・大蔵大臣・桑原知事に對して四学部の設置を要望する意見書が採択されました。



創立当初の岐阜高等農林学校全景（『岐阜大学農学部十年の歩み』より）

◆岐阜農専の越県包括構想

しかし、たとえ地元への支援があつたとしても、既存の高等教育機関を基礎とすることができれば、必要な経費がかなり少なくて済むことは事実です。そこで田村総長は、岐阜農林専門学校（岐阜農専）を越県包括するという、思い切った構想を打ち出しました。

もちろん田村総長は、経費節約のためだけに岐阜農専の包括を思い立ったわけではありません。岐阜農専は一九二三（大正一二）年、官立岐阜高等農林学校として創設されました。所在地は岐阜県稲葉郡那加村（現岐阜県各務原市^{かみかきはら}）で、愛知県と岐阜県の境に近い、木曾川をはさんだ向こう側にありました。四四（昭和一九）年には岐阜農林専門学校と改称されています。同校は、専門学校ながら教員による研究もさかんであり、一九四七年当時、全国の農林専門学校の中で最も多い六学科を有するという、大学の学部の基礎とす

るにふさわしい内実をそなえていたのです。

一九四七年九月、田村総長は岐阜農専を訪問し、農学部之母体となることを蝮川睦之助校長に強く要請しました。教員と学生の大勢はこれを支持し、全校あげての名大合流運動が始まりました。蝮川校長も文部省に陳情するなど、岐阜農専包括構想は比較的容易に実現するかに見えました。

◆構想の挫折

ところが、翌一九四八（昭和二三）年八月、文部省は「国立新制大学実施要領」を策定します。これは、GHQ／SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）のCI&E（民間情報教育局）が文部省に提示した方針にもとづいたものです。そこには、一府県一国立大学の実現や、大学の学部は他の府県にまたがらない原則がうたわれていました。

これをきっかけに武藤嘉門^{かも}岐阜県知事は、名大の岐阜農専包括に強く反対するようになり、岐阜県議会でも包括反対の決議が可決されました。岐阜に国立総合大学を創設する場合、岐阜農専はその基盤として重要になるだけに、愛知県に岐阜農専を取られるなど、岐阜県下の包括反対運動は盛り上がっていったのです。

田村総長は、依然として岐阜農専内部は包括に賛成だったこともあり、簡単にはあきらめず

手を尽くしましたが、事態は好転しませんでした。一九四九年一月には、吉田茂総理大臣による岐阜農専訪問、関係者からの事情聴取という一幕もありましたが、最終的には同年二月の名古屋大学評議会で、文部省から包括の許可が下りなかつたことが報告されています。

なお岐阜農専は、四九年に新制岐阜大学の農学部（現在は応用生物科学部）となりました。

◆農学部抜きの新制名古屋大学発足

このように、農学部設置の枠組みの決定が遅れたため、一九四七（昭和二二）年一〇月の名古屋大学評議会では、創設案からひとまず農学部は除外され、曲折をへながらも、一九四八年九月には文学部と法経学部が設置されました。当時の文部省には、旧制のうちにできるだけ新学部を設置しておくとの方針があつたらしく、農学部がこれに乗れなかつたことは、さらに創設が遅れる原因となりました。

そして、新制大学認可の申請書を作成する際にも、これに農学部を入れるかどうか問題となりました。文部省は、岐阜農専包括がどうなるか分からないことから、二種類の案を提出するように指示しましたが、名古屋大学はあえて農学部を含めた案のみを提出しました。しかし包括構想が断念をよぎなくされると、ついに申請書から農学部が削除され、新制名古屋大学は一九四九年五月、医・工・理・文・法経・教育の六学部で出発せざるをえませんでした。農学

部だけが新制大学発足に間に合わなかったのです。

田村総長は、新制名古屋大学発足の直前、農学部未設置を心残りとしたまま、急な病で亡くなりました。その事業は、勝沼精蔵第三代総長に引き継がれることとなります。

◆農学部創設運動の再開

勝沼精蔵新総長は、就任するや農学部創設へ向けて行動を開始し、名古屋大学復興後援会や愛知県の政財界にはたらきかけました。もともと、すでに愛知県議会は、一九四八（昭和二三年）七月、政府に「農林大学設置に関する意見書」を提出し、「農業県たる本県において農業に関する最高教育機関が無いことは、本県民の^{ひと}齊しく^い遺憾とするところである。」と述べるなど、愛知県への高等農業教育機関の設置に強い意欲を見せていました。



勝沼精蔵第三代総長

そして、早くも一九四九年七月の名古屋大学協議会において、安城農林高校（旧安城農林学校）などを基礎として農学部を創設する気運が濃厚になったことが説明され、農学部創設委員会を設置することが決定されました。県議会でも、翌八月に「名古屋大学に農学部設置に関する意見書」を政府に提出し、一月には

名古屋大学農学部創設に全面的に協力することが決議されました。

◆県あげての創設運動

この決議をうけて、愛知県議会大学設置調査委員会の権限が強化され、同委員会が中心になって関係省庁への陳情などが行われるようになりました。また、同年七月には、名古屋大学農学部創設後援会の結成準備会が開かれました。これは、青柳秀夫あおやき県知事を会長、伊藤次郎左衛門名古屋商工会議所会頭を副会長とし、県議会議長、県下各町村議会の議長、名古屋市長、名古屋市議会議長、安城町長、県農協連合会の代表者などを理事とするもので、本部は愛知県庁内に置かれることになりました。まさに県あげての運動です。

当時、文部省から創設許可を得るに最も重要なのは、創設に際して地元からどれだけの経費や施設の負担がなされるかということでした。県議会大学設置調査委員会は、県が設備費として三五〇〇万円を国へ寄付することを提案し、これが一九四九（昭和二四）年一二月の県議会で採択されています。そして翌五〇年八月には、県知事・県議会議長・名古屋商工会議所会頭の連名で、文部大臣に「名古屋大学農学部設置に関する陳情書」が提出されました。そこには、県からの三五〇〇万円のほかに、関係団体からさらに四〇〇〇万円の資金を集めることが提示されています。

◆安城町による誘致

愛知県の市町村のうち、名大農学部誘致に最も積極的だったのが安城町です。前章で見たように、安城町は日本デンマーク農業の中心地であり、古い歴史を持ち高等教育機関への昇格がめざされたこともある安城農林学校（当時は新制の安城農林高校）の所在地でした。

誘致に大きな役割を果たしたのが、県議会議長と安城町長を兼任していた大見為次おのみたけじです。一八九四（明治二七）年、碧海郡安城村字出郷（現安城市新田町）に生まれた大見は、安城農林



大見為次像（JAあいち中央新田支店）

学校（当時は愛知県立農林学校）で山崎延吉の薫陶くんとうをうけ、卒業後は安城町会議員や県会議員、碧海郡購買販売組合連合会会長、安城町農会総代を務めるなど、日本デンマークの指導者として活躍した人物でした。敗戦後、農業を生かしつつ多様な発展の道を模索していた大見にとって、母校を基礎に名大農学部を誘致する構想は魅力的だったはず。また、愛知学芸大学（安

城分校)と安城学園女子短期大学(一九五〇年昇格、現愛知学泉短期大学)に名大農学部を加え、全国で唯一の三大学を持つ町になるという学園都市構想もあつたようです。

しかし安城農林は、空襲による被害はまぬがれたものの、敗戦直後の一九四五年一〇月、不慮の火災によつて多くの校舎が全焼する惨事にみまわれていました。校舎は再建されましたが、やはり農学部を中心になるのは難しかったようです。そこで、安城農林を農学部付属高校や教育学部付属実験高校とする道が模索されましたが、これも実現には至りませんでした。

◆愛知学芸大学安城分校

最終的に農学部のキャンパスに決定したのは、同じ安城町(大字安城字小山、現安城市新田町小山)の愛知学芸大学安城分校でした。

その歴史は、一九一八(大正七)年に県立農林学校内に設置された、愛知県農業補習学校教員養成所にさかのぼることができます。やがて校舎は独立しましたが、所長は農林学校長が兼務していました。愛知県実業教員養成所をへて、一九三五(昭和一〇)年には愛知県青年学校教員養成所となり、四四年には官立愛知青年師範学校となりました。そして敗戦後の一九四九年五月、名古屋の愛知第一師範学校、岡崎の愛知第二師範学校とともに、国立愛知学芸大学の母体となり、その安城分校となったのです。元来が農業教育の教員を養成する機関で、農場そ

他の施設もある程度そろっていたため、農学部のカンパスに好適でもあったわけです。

安城町の誘致への熱意はおとろえず、一九五〇年八月に臨時町議会を開催し、農学部教員用住宅三〇戸の建設と、安城分校存続運動が起こっていたことから、もし同分校転用ができなくなった場合は安城町の責任において代替施設を用意することを議決しました。

また、安城分校を転用するといっても、愛知学芸大学にはそれに替わる施設を用意する必要がありました。その費用二〇〇〇万円も愛知県が負担しました。先ほどの七五〇〇万円と合わせて、一億円近い資金が、愛知県や県内の団体から寄付されたわけです。一九五〇年度における愛知県の一般会計歳出総額が、約八二億円だった時代です。単純な換算ですが、二〇〇五年度における愛知県一般会計予算総額が約二兆一五〇〇億円ですから、現在の二五〇億円くらいでしょうか。一学部の創設に二五〇億円。地元の期待のほどをうかがうことができます。

◆農学部創設の決定

こうした地元の強力な運動や支援もあり、政府でも農学部設置の方向は認められましたが、キャンパスや施設の準備が遅れたため、一九五〇（昭和二五）年度からの創設は断念せざるをえなくなりました。

しかし、一九五〇年の秋には、翌年度からの創設が政府において内定しました。これをうけ

て一二月には農学部設置委員会の設置が決定し、二人の学内委員とともに、四人の東京大学農学部教授・名誉教授が学外委員に委嘱されました。その中の増井清、雨宮育作の両名誉教授は、農学部創設後には教授となり、いずれも農学部長を務めています。そして、一九五一年二月二三日の文部省大学設置審議会総会で正式に決定し、三月一五日付で文部次官から勝沼総長宛に認可通知が到着したのです。

愛知県への高等農業教育機関創設がめざされてから実に三五年、田村春吉らによって本格的に名古屋総合大学への農学部設置が構想されてから二〇年の道のりでした。

◆名古屋大学農学部の誕生

そして一九五一（昭和二六）年四月一日、法律第八四号によって、ついに名古屋大学農学部が誕生しました。

設置が認められた講座は、農学科七講座、林学科五講座、畜産学科四講座、農芸化学科六講座に共通講座三講座を加えた二五講座でした。しかし発足時に開講されたのは四講座のみで、教員もたった四名でした。初代農学部長には、農学部設置委員を務めた増井清教授が就任しました。

最初の入学試験は、他学部より遅れて五一年三月一七日から二〇日までの四日間、身体検査

と一緒に行われました。定員一一〇名に応募総数は四七八名と、倍率は四・三倍でした。実際の合格者は一三〇名でしたが、名大の他学部と重複志願し両方に合格した者がかなりあり、合格はしたものの入学手続きをしなかった者もあつて、初年度の入学者は四八名でした。

かなりさびしい陣容でのスタートとなったわけですが、何ととっても勝沼総長が就任してから二年足らずですから、これもやむをえなかったのかもしれない。

三、草創期の農学部と安城キャンパス

◆山積する課題

ようやく誕生した農学部と安城キャンパスですが、創設された当初はあまり実態があるとはいえない状況でした。前章で見たように、教員は最初四人だけでしたし、新入生も最初の二年間は豊川分校や名古屋市の瑞穂分校で教養課程を修めなければならぬので、農学部で講義を受けることはありません。

しかも、愛知学芸大学安城分校の岡崎への移転が完了するまでの間は、安城キャンパスも思うようには使えませんでした。そのため当初の農学部事務室は、名城キャンパス（本部・文学部・教育学部・法学部など）の附属図書館内にありました。教員の研究室も、東山の理学部、高蔵の工学部、安城の愛知県農事試験場などに「間借り」していたのです。

そのほかにも課題は山積していました。実は、文部省の農学部設置認可には、次のような条件が付けられていたのです。

- (1) 一九五二（昭和二七）年度中に図書館を建設するように計画を立てること。
- (2) 研究用農場を近接地に設けること。
- (3) 図書、標本機械器具の整備充実をすること。
- (4) 学科の増設、既設学科の変更については、当分の間大学設置審議会に協議すること。
- (5) 教員組織については、これが充実するまでは大学設置審議会に協議すること。
- (6) 二年以内に必要な整備拡充をおこなって、大学としての完成を期すること。

これらの事項については大学設置審議会に報告し、必要があれば同審議会が審査するというものでした。要するに、一人前の学部になれるかどうか、最初の二年間は文部省が指導するということでしょう。

◆安城キャンパスの整備

一九五二（昭和二七）年度になると、教員や講座が増えたため、安城キャンパス内の愛知学芸大学附属安城中学校の校舎の移管を受け、事務部と新設講座が暫定的に入りました。またこの年には、正門から見て右側に、木造二階建ての白い校舎二棟（一号館、二号館）が建築され、農学科と畜産学科の研究室がここに移りました。やがて愛知学芸大学安城分校の移転が完了し



建築中の農学部新校舎



農学部本館とその前庭

ため、諸施設を自由に利用することができるようになり、名実ともに安城キャンパスが農学部のものとなったのです。その後、校舎の改造や増築、実験施設の増加などがありました。キャンパス内の構造・景観が劇的に変わるようなことはなかったようです。

設置の条件としてあげられていた研究図書の整備も、学部存立の根幹にかかわる大きな課題でした。これについては、思いがけぬ所から解決しました。東京大学の矢内原忠雄やないはら総長（植民政策学者、戦前期にはいわゆる「矢内原事件」で一度は東京帝大を追われた）が名大農学部を訪れた際、東大農学部の図書整理で出てきた重複文献を提供する申し出があったのです。この二万五〇〇〇冊もの農学研究文献に愛知県からの寄贈を加え、農学部の蔵書は確保されたのでした。

◆実習・実験施設の充実

現在でもそうですが、とりわけ当時の農学部には、研究にも教育にも、充実した実習・実験施設が必要でした。農学部創設にあたり、それらの施設は用意されましたが、多くは借用であり、創設後にその本格的な確保がはかれることになりました。

農場は、安城キャンパスの隣接地に安城市などからの提供を受け、五四年には文部省から正式に農学部附属農場として認可され、安城農場（約四万六〇〇〇㎡）と呼ばれました。さらに

同じ五四年には、豊川市に約一三万二〇〇〇m²の農場を確保しました。これは、名大豊川分校にあった教養部が名古屋へ移転となったので、その土地と施設を利用したものです。この豊川農場は、広さを生かして機械化農業の実験施設となりました。現在は愛知県立豊川工業高校のキャンパスになっています。

演習林は、林学科の教育・研究に不可欠なものです。広大な林野が必要とされるため、十分な整備が難しい施設でもありました。そこで一九五五年、愛知県北設楽郡きたしたら稲武町内の、町長が管理する部落有林を、分収契約によって演習林として使用することになりました。林野の分収契約とは、土地所有者（地主）と立木所有者（経営者）が異なり、そこから上がる収益を両者が一定の割合で分けることを言います。名大はこの契約で、約一六五万m²の林野の、六〇年間の地上権を取得しました。現在でも名大は、フィールド教育支援センター稲武フィールド（旧大学院生命農学研究科附属演習林）として、同林野約一四四万m²の地上権を持っています。

◆講座・スタッフの拡充

四学科四講座でスタートした農学部も、その後毎年のように講座が充実し、一九五五（昭和三〇）年に農学部の講座が省令化された時には四学科二一講座となりました。以後、少しずつですが講座は増え、一九六五年には林産学科が設置され、東山移転時には五学科二五講座



初期のスタッフ。前列右が増井清初代学部長、前列中が雨宮育作第三代学部長。

技官・事務官の数も同様の推移で、七〇人前後でしたが、人を超えました。その後も一〇〇人前後です。スタッフの総数では、一九六二年に大幅に補充され一〇〇から一六〇人、六三年以後は二〇〇人前後というところでした。

◆大学院農学研究科の設置

名古屋大学に新制大学院が設けられたのは一九五三年度からです。これはほかの国立大学と同じで、四九年に入学した新制第一期生が卒業する年度に合わせたものでした。ただし、農学

になりました。同じ時期の工学部と理学部の急激な講座増には遠くおよびませんが、この両学部以外はみな同じようなものでした。

教員の数も、創設当初は四人でしたが、講座増に比例して増加しました。ただそれが一段落すると増加も止まり、安城時代はだいたい八〇人から九〇人あたりを前後しています。

部と医学部に設置されたのは五五年度です。医学部は、修業年限が他学部より二年長いためですが、農学部の場合は新制でのスタートが二年遅れたからにほかなりません。

また、当時の大学設置審議会の審査は厳格なもので、安城キャンパスやその他の施設の整備が不十分だったこともあり、大学院設置の許可が出るかどうか、勝沼精蔵総長が心配し、雨宮育作農学部長ですらあやぶむほどでした。専攻の設置のあり方をめぐって、文部省と農学部の意見対立もあつたようです。一九五五年二月、文部省による安城キャンパスの実地調査が行われましたが、結局は四学科の上にそれぞれ専攻の設置が認められ、七月一日に名古屋大学大学院農学研究科が正式に発足しました。

ただ大学院生の定員については八四人と、申請の半分ほどしか承認されませんでした。さらに承認の条件として、農場・演習林の整備促進、標本の増強などがあげられていました。

◆学生数の推移

学生数は、安城時代の定員は、最後の一九六五年度を除いては一学年一一〇人と変わりませんでした。卒業者数で見ると一番多い年でも八四人で、定員を大幅に割っています。特に第一回と第二回の卒業生は、それぞれ二一人、二六人という少なさです。安城時代には、全部で約七〇〇人の学生が農学部を卒業しました。

一九五八年のデータによると、当時の名大農学部は、本来は他学部を第一志望にしてい、第二志望で入学して来る者の割合が教育学部の次に高く、入試に合格しながら入学しない者の割合が最も高い学部でした。さらに入学した後も、転学部や他大学への編入学を望む者が少なくありませんでした。

また教養課程を終えたあとは、農学部の学生だけが名古屋市を離れ、見知らぬ安城へ行かなければなりません。最初から分かっていることとはいえ、不安な気持ちになる学生もあつたはずで。

一九五八（昭和三三）年、のちに学生部次長となる牧島久雄教養部助教授は、独自に農学部新入生を対象にしたガイダンスを実施しましたが、その一環として安城キャンパスの見学会を企画しています。その日一日、新入生にキャンパス全般を開放するというもので、好評を博したようですが、それだけ学生の不安が強かったことも示しています。

また、現在の名大農学部は約七割の学生が大学院に進学しますが、安城時代においては進学者はむしろ少数派でした。だいたい一割から二割程度で、東山移転に近くになってようやく本格的に増加し始め、直前の段階で五割程度になりました。全体としてみれば、安城キャンパスの学生の多くは学部生であつたといえます。

四、安城キャンパスの学園生活

◆安城キャンパスの地

安城キャンパスは、現在の安城市新田町小山にあたりますが、農学部創設当初はどのような地域だったのでしょうか。当時の教員などの回想には、ほぼ共通した描写が見られます。

それは、見わたす限り一面の水田地帯で、春にはレンゲ草や菜の花の赤や黄の色どりが見事であり、また雲雀ひばりの高くさえざる声が印象的であつたいいます。実験で使う蛙かえるも周辺の水田で入手できたそうです。明治用水のあたりにはホタルが飛びかい、ザリガニの宝庫でした。実験室にはイタチが迷いこむこともありました。牧歌的な、典型的田園風景の中にあつたと考えでよいでしょう。現在のすつかり市街地化した姿からは全く想像できません。

日本デンマークの中心地であつた安城は、「農都」とも呼ばれていたように、その中心部は市街地化も進んでいましたが、そこを少し離れば、まだまだ田園地帯であつたのです。初期のころには、すぐ近くにあつた安城農林高校や、時には谷崎潤一郎の小説「細雪」さいせき（一九四八年）の舞台となつた蒲郡がまごおりにある農学校とまちがえられたといえます。



1957年の航空写真。矢印が安城キャンパス、その左斜め下に安城農林高校、最下部は国鉄安城駅（『名古屋大学農学部30年史』より）。

当時はガスも普及しておらず、市内から引いてくると大変な経費が必要だったので、ガスの発生装置を用意して各研究室に配管し、「ガス会社」を作ったなどと冷やかされたというエピソードも残っています。当初は、水も井戸からくみ上げていました。

◆通学風景とその変容

現在なら、安城は名古屋からの通勤圏に十分入りますが、当時名古屋から安城に出てくるには、交通機関の乗り換えがうまく行っても二時間ばかりかかったといえます。安城時代の職員録を見ますと、安城に勤務する教職員の多くは、住所が安城市かその近辺になっています。しかし学生は、一九五六（昭和三一）年に名古屋大学学生部が実施した「学生生活態度調査」により



1961年当時の名鉄今村駅（郷土出版社刊『写真集 安城いまむかし』より）

ますと、農学部では約七割が自宅からの通学生であり、多くは名古屋鉄道（名鉄）を使って通学していました。

名鉄の最寄り駅は今村駅、現在の新城駅です。農学部創設当時の今村駅は、田園の中に孤島が浮かぶように駅のホームがあったといえます。しかし、やがて今村には工場が集まるようになり、農学部が東山に移転するころには、安城市内で最も都市化の進んだ地域となりました。これにともなつて、安城キャンパスの周辺も以前のような田園風景一色ではなくなつていきました。いつしか、実験用に簡単に入手できた蛙も姿を消したといえます。

上の写真は一九六一年当時の今村駅の様子ですが、通勤時間帯だけあつて大変な混雑ぶりです。また、ここの踏み切りは待ち時間が長く、ラッ



「名大農学部前」バス停
 (『名古屋大学農学部30年史』より)

シユをひどくして評判が悪かったとの話も残っています。駅からは名鉄バスが出ており、「名大農学部前」のバス停がありました。農学部創設当時には、木炭車のバスもあつたことです。ただ今村駅からは直線で一・五kmあまりの距離ですから、安城キャンパスまで歩いた学生もあつたことでしょう。

◆碧明寮

自宅通学ではない残り三割の学生ですが、当時の安城市内で下宿先を見つけるのは容易ではなかったと思われます。先ほどの一九五六年実施の調査によりますと、自宅生以外の学生の約半分が学生寮で生活していました。約一五％という寮生の比率は、同時期の八学部の中でとびぬけて高い数字です。

キャンパスから徒歩一〇分あまりの所に設けられた、農学部用の学生寮が碧明寮（安城市安城町毛賀知、現安城市桜町安城県税センター）です。その名前は、碧海郡の碧に、寮の近くを



碧明寮

流れている明治用水の明を合わせたものだといわれています。木造平屋建てで、当初は一六畳の一室に五人が割り当てられ、それが八畳で定員四〇名でしたが、のちに八畳の一室に二人となり、定員三〇名になりました。

ところで、農学部というと、理系学部の中では女子学生の比率が高いというイメージがあります。実際、現在の名大農学部では、学部学生の四〇%以上が女性です。しかし、安城時代にはそのような傾向は全くなく、女子学生はいたとしても一学年に一人か二人程度でした。女子学生の比率が高まっていったのは東山へ移転してからです。

そのせいもあってか、碧明寮では文化委員なるものが決められ、安城学園女子短期大学白楊寮の女子学生とダンスパーティーやハイキングがさかんに行われたようです。

◆安城一家

職員のほとんどは安城市近辺に住み、学生の三割が寮生か下宿生で、残りの七割は自宅生とはいえ、実習などでは



実験室での授業風景

長い間自宅を離れることもあつたでしょう。他の学部がいずれも名古屋市内にあつたことを考えると、内部の人々にとつては、一種の独立した単科大学のようなイメージがあつたのではないかと思われれます。しかも同じ理系でも、工学部や理学部に比べてずっと小所帯でした。しかしそれだけに、教職員や学生の交流や意志疎通がよくはかられ、学部の結束はかたくなり、「安城一家」という言葉もあつたほどです。

教員や学生の間ではスポーツがさかんで、安城キャンパスは、元々が学校であつただけに、当初から専用のグラウンド（野球場）があり、校舎の裏にはテニスコートがありました。学部祭でも、野球やテニス、バレー、卓球の試合が開催されました。学生だけではなく教員も熱心で、特に当初は若い先生が多く、教授・助教授だけでチームが作れるほどであつたといえます。スポーツは、学部内の交流はもとより、名古屋に離れた他学部との交流をはかる手段でもありました。名古屋で学部対抗の大会があれば、それだけ力が入つたものでしょう。



芦田淳第六代総長（安城時代）

先ほども引用した一九五六年度の「学生生活態度調査」によると、アルバイトの有無について、農学部生の約六二％がアルバイトをしていないと回答しています。これは全学平均の約三六％を大きく上回っており、それだけ農学部で何かをする時間が長かったことも示しています。

◆教員と学生の交流

教員と学生の関係も、他学部に比べて親密であったようです。やはり五六年度の調査ですが、学生に教員との接触の度合いを質問して得た回答のデータがあります。それによりますと、

「非常に多い」と答えた者が約一六％もありました。

これは他学部を大きく引き離しています。また「かなり多い」も約二九％と、八学部の中でトップです。逆に「殆どない」は一一％だけでした。

一九五三（昭和二八）年に安城へ赴任し、六四年からは農学部長、六九年から七五年までは名古屋大学総長を務めた芦田淳^{きよし}名誉教授は、当時の教員と学生の関係を次のように回想しています。

安城の木造校舎で、夏はすだれを掛けて暑さを凌ぎ、冬は毎朝交代で石炭ストーブに火をついたり、煙突を掃除するのに苦労したものである。今から考えると、あの頃の日本は貧乏であった。しかし、楽しい思い出もある。ストーブを囲んでスルメを焼きながら一杯飲みあれこれ話し、ときに世の中のこと、また生き方に及び、学生と激論を戦わせたことも懐かしく思い出される。教官、学生ともよく学び、よく遊び、連帯感を持つことができた。これは、大学生数が少なく教官と学生との間に大学に対するイメージに差がなかったからであろう。

（『名古屋大学農学部三十年史』一〇六頁）

芦田名誉教授は、二〇〇一（平成一三）年、農学部創立五〇周年記念祝賀会に出席したあと、ほどなく亡くなられましたが、その蔵書の一部は、ご遺族から名古屋大学文書資料室に寄贈されています。

◆ 第一回卒業生とメタセコイア

名大農学部第一期生が卒業したのは、一九五五（昭和三〇）年三月のことです。わずか二一名という少人数でしたが、その彼らが卒業記念に植樹したのが、三本のメタセコイアでした。

現在では珍しくもなくなつたメタセコイアですが、当時においては大変貴重な樹木でした。メタセコイアは、つい六五年前までは、化石の中だけで確認できる絶滅種であると考えられて



植樹した当時のメタセコイア
 (『名古屋大学農学部30年史』より)

いたのです。それが一九四一年に、中国四川省で樹齢四五〇年と推定される巨木が発見され、「生きた化石」として世界的な話題となりました。スギ科メタセコイア属です。同じスギ科でも、セコイアが常緑樹なのに対してメタセコイアは落葉樹で、冬にはすっかり葉を落とすのが特徴です。

一九四九年、カリフォルニア大学のチェイニー教授から、メタセコイアの苗木が昭和天皇に献上され、天皇はこれを吹上庭園に植樹して、アケボノスギと名づけて愛でたといえます。このチェイニー教授は、五〇年には一〇〇本の苗木を東大農学部の原寛教授に贈り、そのうちの四本が東大農学部附属清澄演習林に植えられました。そして、卒業生の一人保田幹男氏（現名大名誉教授）が、その清澄演習林長から名大に赴任した造林学の高原末基教授を通じ、同演習林から取れた苗木を入手することになったのでした。

◆伊勢湾台風の被害

前章で、一号館と二号館の新築以外は、安城キャンパスの景観が劇的に変わることはなかったと書きましたが、違う意味で景観を変えたのが一九五九（昭和三四）年の伊勢湾台風です。



伊勢湾台風直後の農学部5号館（『名古屋大学農学部30年史』より）

九月二六日の夜、九四〇kmという勢力を保ったまま名古屋市の西方三〇kmを通過したこの超大型台風によって、愛知県では死者行方不明者が約三二〇〇人、床下浸水以上の住家被害は二四万戸に達しました。これに対し、安城市は人的被害こそ比較的軽かったものの、住宅と特に田畑の被害はきわめて甚大でした。安城市にも災害救助法が発令されましたが、市内全域が完全断水したうえに、交通路が遮断され、情報もとだえがちであったために、救援物資が届くまで、市民はとても不安な日々をおくったといえます。

農学部は、建物が仮設の簡易なものが多かったこともあり、とりわけダメージが大きかったようです。ガラスは割れ、瓦は飛び、多くの校舎が中破・小破状態になりました。碧明寮も倒壊をかるうじてまぬがれたほどだったといえます。実験器

具や装置は、室内に散乱していればよい方で、どこに行つたが分からないくらい吹き飛ばされたものもあつて、修理せずに使えるものはほとんどなかつたほどでした。また安城キャンパスは農場や畜産動物を持つていたため、こちらの被害も尋常ではありませんでした。

この結果、農学部 of 被害見積額は、豊川農場を含めると約六〇〇万円におよびました。これは現在の三億円くらいに相当する額です。

五、東山キャンパスへ

◆東山移転への願い

これまで見てきたように、名古屋大学が名実ともに総合大学となることを願う、大学関係者や愛知県民の熱意と支援よって誕生し、構成員が結束して教育・研究に取り組んでいた農学部ですが、やはり名古屋から離れた安城という立地条件による制約をまぬがれることはできませんでした。

「通学やアルバイトの不便はともかく、他学部との交流が難しいことは、総合大学の学部としての利点を生かせないということであり、教員と学生の大きな不満になっていました。他学部の教員や学生と交流することの重要性は、通信手段が発達していなかった当時、現在よりもさらに大きかったにちがいありません。他学部の講義や講演を自由に聴いたり、図書や実験器具を自由に利用したりしたいという願いは、安城キャンパスが生まれた当初からくすぶっていたようです。学生生活の重要な一環である部活動やサークル活動にしても、学部を超えた人的交流があつてこそ真価を発揮するといふものです。」

また、いずれ東山に移転するだろうという、ぼんやりとした前提のために、キャンパス整備がなかなか本格的化しないという不満もあつたことでしょう。前章で見た一九五九（昭和三四）年の伊勢湾台風は、こうした不満をあらためて浮き彫りにしたようです。

◆名古屋大学整備計画における農学部

敗戦後、既存学部の復興と、新学部設置事業に追われてきた名古屋大学ですが、一九五〇（昭和二五）年になると、GHQ/SCAPの意をうけた文部省の指示もあつて、学長と部長から構成される整備計画委員会を設置し、第一期整備計画を策定しました。

この計画最大の目標は、医学部を除く各学部を東山キャンパスへ集結させ、総合大学としての実を上げることでした。しかし、農学部だけは安城キャンパスにおいて整備することとされたのです。もちろん勝沼精蔵総長も、農学部も東山で整備することが理想であるとの認識は持っていました。そこで問題となるのが安城市との関係でした。

第二章で見たように、敗戦後の困難な時代にあつて、莫大な経費や設備を必要とする農学部をあれほど早く創設できたのは、地元安城の全面的な協力があつてこそでした。ようやく実現したと思つたらすぐに移転の話では、安城市民や、まだ現職にあつた大見為次市長が納得しないことは明白です。したがって、移転の構想やプランはあつても公にはできず、勝沼総長が現

職に在る間は、移転話じたいが一種のタブーになっていたようです。

◆移転計画の確定

農学部でも、増井清初代学部長や雨宮育作第三代学部長は、農学部設置委員会のメンバーでもあり、当時の経緯をよく知るだけに、勝沼総長と同じ思いを強く持っていたようです。

昭和三〇年代に入ると、農学部の若手教員を中心に、そういったタブーを破っても東山移転を実現しようという動きが出てきました。学部内の移転を要望する声を背景に、若手教員有志を中心に非公式な委員会が結成され、時には強引な行動もしたようです。その結果かどうかは分かりませんが、当時現職の中山博一農学部長の回想によると、一九五七（昭和三二）年一月の名古屋大学協議会で、勝沼総長が農学部の東山移転について言及したといえます。ただ、同年七月の評議会で承認された第二期整備計画案では、「農学部の所要建築は一般営繕費によることとし情勢が熟し諸準備の整い次第この計画に加える。」とされ、それがいつのことになるのかは、依然として不明なままでした。

これをうけて、整備計画委員会では、農学部を理学部の東北方面、すなわち現在の農学部の位置に移転させる構想が検討されましたが、これが公式のものとなったのは、やはり一九五九年に勝沼総長が辞任してからでした。またこの年には、創設当時の安城町長であった大見為次

市長も職を退いています。

そして六〇年六月の整備計画委員会において、五島善秋農学部長からの要請に応じ、移転計画を公表することが承認されたのです。

◆キャンパス跡地の処遇と財源問題

しかし、創設当時の責任者が現職を退いたといっても、安城市の十分な理解を求める必要があったのは当然のことです。その結果、一九六一（昭和三六）年一二月になって、ようやく同市の承諾をえることができました。ただその後、跡地の処遇をめぐる問題が出てきました。

安城市は、もともとこのキャンパス用地は、戦前に安城町が寄付したもので、公共用地として利用したいと、無償返還を要望しました。松坂佐一総長もその方向で努力する意向を表明していましたが、農学部の整備委員会は、移転にともなう校舎建設費用の財源にあてるため、有償を主張しました。

結局、校舎建設費用は別の方法で予算化することになり、無償譲渡されることが決まりました。ここは現在、各種の運動施設をそろえた安城市総合運動公園になっています。

校舎建設費用の財源については、豊川農場を国に提供する代わりにそれに見合う予算を計上してもらおう方式が検討されました。しかしそれだけでは、農学部の設置要件である農場がなく



整地された農学部建設用地
 (見えるのは本部と職員会館、『名古屋大学農学部30年史』より)

なつてしまいます。ただ運よく、愛知県愛知郡東郷村（現東郷町）にあつた農林省振興局研究部の試験地約二八万 m^2 が、愛知用水の完成とともに任務を終了してることが分かりました。当初農林省は難色を示しましたが、桑原幹根県知事や県選出国會議員の力添えもあつて、一九六二年三月に同地を東郷農場として取得することができました。現在でもフィールド教育支援センター東郷フィールド（旧大学院生命農学研究科附属農場）として存続しています。

◆移転成る

こうして移転の制約となつていた問題が解決され、一九六二（昭和三七）年九月の整備計画委員会では、農学部の移転が正式に第三次整備計画に組み入れられました。ただし翌年度は、

名城キャンパスの文学部・教育学部・本部が東山へ移転することになっていたため、これが完了するのを待つてから、農学部に移転に着手することになりました。結局農学部は、医学部を除けば、創設につづいて東山終結も最後になったわけです。

東山キャンパスの新校舎は、一九六五年四月に着工され、翌六六年三月に完成しました。各研究室は二月に実験を打ち切り、三月に入試事務が終わると同時に移転の準備にとりかかりました。一五年間にわたって蓄積された設備・器具や教育資材、図書、書類などは膨大なものであり、荷物の梱包にのべ一四〇〇人、搬出にも一二〇〇人以上、二七〇台もの運送用トラックを必要としました。

◆新しい農学部とその景観

新校舎の建築は、農学部の建築委員会が苦心し、諸外国の大学建築物の配置などを参考にし、それらの長所がとり入れられていました。この時に建築されたのは、現在でいえばA館西研究棟（一号館）、A館東研究棟（二号館、同年東側へ大幅に増築）、管理棟（三号館、一九七〇年に東側へ増築）、講義棟（四号館）ですが、それぞれを渡り廊下で結ぶ建築方式になっていることが特徴でした。これは、東山に移つても、安城時代と同じように構成員の結束をかたくしていこうという願いもこめられています。のちに建てられたB館（五号館・六号館）も、



東山移転当時の農学部全景（『名古屋大学農学部30年史』より）

同じように廊下などでA館とつながっています。そのほかにも、研究室や実験室などの床面積は安城時代の二倍以上となり、全館暖房システムやエレベーター、全館冷暖房完備の立派な図書館、充実した複写室など、当時としては最新の設備が取り入れられていました。

ただ校舎をめぐる景観はといえば、現在とは異なっていました。当時の農学部の敷地は山肌をけずり取ったままの状態であったため、雨の日はぬかるみ、通勤通学や学内移動は大変でした。敷地の周囲も、安城時代が田園風景であったとすれば、現在の東山は森林風景であるという当時の文章が残っています。また名古屋大学初の六階建てとなった研究棟の屋上からの眺めは、近辺の開発が十分に進んでいなかったこともあり、現在よりもさらに壮観であったようです。



現在の農学部（大学院生命農学研究科）
全景（『名古屋大学農学部50年史』より）

◆メタセコイアの移植

前章でふれた、第一回卒業生によつて植樹された三本のメタセコイアも、伊勢湾台風を生き残り、記念碑とともに東山キャンパスの今の場所に移植されました。植樹した当時は1m足らずであつたのが、一〇年あまりですでに一〇m近くになっていました。メタセコイアは丈夫で成長が早く、巨木になることも知られ、最初に中国で発見されたものは樹高が二九m以上であつたといっていますから、農学部のメタセコイアもさらに高くなつていくかもしれません。

二〇〇一（平成一三）年、名古屋大学農学部同窓会は、農学部創立五〇周年を機に会の愛称を募集し、その結果「セコイア会」とすることに決まりました。同窓会報も「セコイア通信」と呼ばれています。セコイアとメタセコイアは、厳密には別種の植物ですが、アメリカのセコイア国立公園にある、世界最大

の樹木といわれる樹高八三mのジャイアント・セコイアのイメージに加えて、長寿であるセコイアと農学部の住所である「不老」町をかけた意味合いもあるそうです。



現在のメタセコイア（中央）。後ろに見えるのは農学部A館西研究棟。

おわりに

限られた紙数ではありませんが、名古屋大学農学部が、諸事情によって遅れたものの大学関係者や地元の強い熱意や支援によって創設され、安城時代の草創期にはさまざまな苦勞をして現在の礎をきざった、その歴史の一端はご理解いただけたかと思えます。

名古屋大学農学部は、一九九七（平成九）年度から、いわゆる大学院重点化によって、大学院生命農学研究科を中心とする組織として再出発しました。「農学のフロンランナー」として、生命科学の研究を通じて環境に調和した人類の発展をめざす、「生命農学」に関する高度な研究と教育を実践しています。二〇〇四年の大学法人化をへた現在、一二〇〇人近い学生・院生を持つ組織に成長し、国際社会に優秀な研究と人材を送り出しています。

二〇〇一年、農学部は創立五〇周年を迎え、盛大な祝賀会が催されましたが、昨年六月、さやかながらもう一つの五〇周年祝賀会がありました。農学部第一期生の卒業五〇周年を記念するものです。七〇歳をこえて元気な姿を見せた第一回卒業生たちが五〇年前に植えた三本のメタセコイアは、現在でも後輩たちを見守っています。

主要参考文献

- 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一・二、部局史二（名古屋大学、一九九五、八九）
- 名古屋大学農学部五十年史編纂委員会編『名古屋大学農学部五十年史』（名古屋大学農学部、二〇〇二）
- 名古屋大学農学部三十年史編纂委員会編『名古屋大学農学部三十年史』（名古屋大学農学部、一九八二）
- 『名古屋大学農学部同窓会報（セコイア通信）』
- 愛知県学事係長片山五郎編『名古屋大学農学部創設について』（名古屋大学農学部創設後援会、一九五二）
- 永塚利一『渋沢元治』（電気情報社、一九六九）
- 春光同門会編『田村春吉』（名古屋大学医学部皮泌科春光同門会、一九五四）
- 須川義弘『半生を顧みる』（須川徳子、一九八二）
- 名古屋大学学生部『名古屋大学学生生活態度調査 第一次報告』（一九五七）
- 安城市史編さん委員会編『安城市史』（愛知県安城市役所、一九七二）
- 安城農林百年史編集委員会編『安城農林百年史』（愛知県立安城農林高等学校同窓会、二〇〇二）
- 愛知県議会議務局編『愛知県議会史』第三〜九卷（愛知県議会、一九五九〜一九八一）
- 塩沢君夫・斎藤勇・近藤哲生『愛知県の百年』（山川出版社、一九九三）
- 愛知県編刊『愛知県昭和史』上・下巻（一九七二・一九七三）
- 愛知教育大学史編さん専門委員会編『愛知教育大学史』（愛知教育大学、一九七五）
- 作道好男・作道克彦編『岐阜大学農学部六十年史』（教育文化出版、一九八三）

著者略歴

堀田 慎一郎 (ほった しんいちろう)

一九六九年 愛知県豊橋市生まれ

二〇〇〇年 名古屋大学大学院文学研究
科博士後期課程修了(歴史学)

現在 名古屋大学文学書資料室助手
専攻 日本近代史、記録史料学

名大史ブックレット11

農学部誕生と安城キャンパス

——学部誕生と草創期①——

二〇〇六年三月三十一日 第一刷発行

著者 堀田 慎一郎

編集発行 名古屋大学文学書資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二(七八九)二〇四六

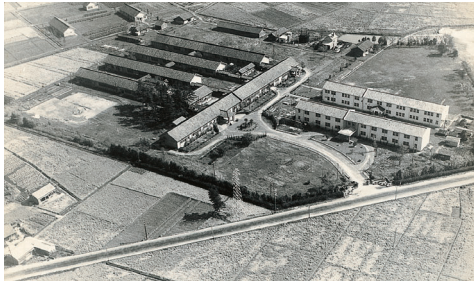
印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九二〇
電話 〇五二(八七一)九一九〇

名大史ブックレット

シリーズ 既刊本

-
- ① これまでの大学院・これからの大学院
山口 拓史 2000年12月刊
-
- ② 名古屋大学 キャンパスの歴史1 (学部編)
神谷 智 2001年2月刊
-
- ③ 名古屋大学 スポーツの歩み
高橋 義雄 2001年3月刊
-
- ④ 豊田講堂と古川図書館—名古屋大学の寄付建物—
堀田典裕・木方十根 2001年12月刊
-
- ⑤ 名古屋大学最初の外国人教師—ヨンゲハンス先生とローレツ先生—
加藤 鉦治 2002年3月刊
-
- ⑥ 草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治
神谷 智 2003年3月刊
-
- ⑦ 名大祭—四〇年のあゆみ—
山口 拓史 2003年3月刊
-
- ⑧ 岡崎高等師範学校—新制名古屋大学の包括学校③—
山口 拓史 2004年3月刊
-
- ⑨ 豊田講堂—*Toyoda Auditorium*—
山口 拓史 2004年9月刊
-
- ⑩ 名古屋高等商業学校—新制名古屋大学の包括学校②—
堀田慎一郎 2005年3月刊
-



表紙写真：名古屋大学安城キャンパス
(1951～1966年) 全景